

図書館だより

《 鹿児島国際大学附属図書館報 》

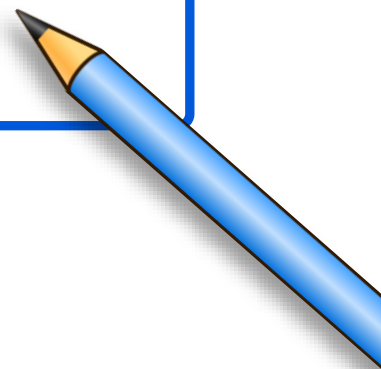
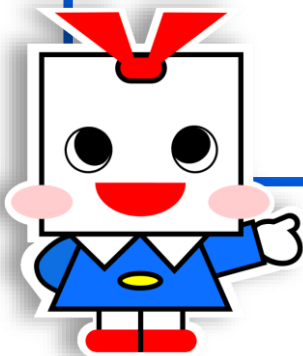
The International University of Kagoshima Library

第
40
号



目 次 Contents

- 五島美術館所蔵『紫式部日記絵巻』複製品展示会 特別寄稿
国宝絵巻の詞書から絵を「読む」・・・武藤 那賀子・・・p.2
- Library Report・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.4



五島美術館所蔵『紫式部日記絵巻』複製品展示会 特別寄稿 **国宝絵巻の詞書から絵を「読む」**

国際文化学部専任講師 **武藤 那賀子**

●鎌倉時代写「若紫」の発見と報道の誤り●

2019年10月上旬、新聞を賑わせた発見があった。
 藤原定家(1162-1241)が制作に関わった『源氏物語』
 「若紫」帖が、大河内家から見つかったというものである。ただし、この報道に関しては多くの間違いがあった。当時の報道には、「源氏物語」最古の写本「若紫」を発見、鎌倉初期に藤原定家が校訂「原本に最も近い『若紫』」といった記述があったが、下線を引いた箇所は全て誤りである(当時の報道に関する詳細な批評は、佐々木孝浩『『源氏物語』本文研究の蹉跎——「若紫」帖発見報道をめぐって——』(『日本文学』69-7、2020年7月)に詳しい)。



【図1】発見された「若紫」帖
 『日本経済新聞電子版』2019年10月8日 17:00

【くずし字】

図1の写真の字は「くずし字(あるいは変体仮名)」と呼ばれる。ひらがなは漢字をくずして作られた文字なのでこの名称。現在は五十音図と呼ばれるひらがなの一覧があるが、1900年以前にはくずし字が使用されていた。くずし字では、一つのひらがなに複数の字母(漢字)があったため、いくつもの字形を覚える必要があった。

●紫式部自筆の『源氏物語』は現存しない●

さて、高校までの教育では、『源氏物語』の作者は紫式部とされている。しかし、紫式部自筆の『源氏物語』は現存しない。そのうえ、『源氏物語』の本文そのものが、平安時代末期頃にはかなり乱れてし

まっていた(一貫した物語として読めなくなったり意味の通じない文章ができたりすること)とされている。それを、「校合」(複数の写本を見比べて本文を整えること)したのが、藤原定家や源光行(1163-1244)・親行父子である。彼らが校合した『源氏物語』が多くの人の手によって書写し続けられて現代に残った。それらのうち、藤原定家が校合したとされる本文の系統を汲むものが活字化され、各出版社の方針に従って「校訂」(本文の誤りを正し、漢字や仮名を統一して読みやすくすること)された本文が、現在、私たちが書店や図書館で手にすることができる『源氏物語』である。このことを簡単にまとめると、以下ようになる。

- 原案 紫式部(藤式部)
- 校合 藤原定家
源光行・親行
- 書写 多くの人々
- 校訂 各出版社に委託された研究者等

【『源氏物語』の諸本系統】

『源氏物語』は数多く書写(コピー)されてきた。これらは分類することができる。藤原定家が校合した本文に近いものは「定家本系」と呼ばれる。源光行・親行が校合した本文に近いものは、親子二代にわたって河内守(現代でいうところの大阪府知事)であったことから、「河内本系」と呼ばれる。しかし、そのどちらにも当てはまらないものは「別本」と呼ばれ、系統としては確立しない。鹿児島国際大学附属図書館が所蔵する『源氏物語』15帖のなかには別本があり、興味深い資料といえる。

●紫式部が『源氏物語』を書いたとされる根拠●

そもそも、『源氏物語』は本当に紫式部によって書かれたのであろうか。その根拠とされるものは数少ないが、有力なものが『紫式部日記』にある。『紫式

部日記』は、紫式部が一条天皇の中宮^{しゅうし}彰子の女房として宮仕えしていた折に見聞した事柄のうち、寛弘五年（1008年）から寛弘七年（1010年）までを書き記したものである。これらの記事の中に、^{あつひら}淳成親王（中宮彰子の第一皇子^{おんい}）の御五十日の祝いの^{きょうえん}饗宴の席上で、藤原公任^{きんとう}（966-1041）が式部に呼びかけた「わかむらさきや候（若紫や候／我が紫や候）」という言葉がある。これが、紫式部が『源氏物語』を書いたとされる根拠の一つとなっている。

今回の展示で扱うのは、『紫式部日記』を絵巻にした『紫式部日記絵巻』の複製品である。『紫式部日記絵巻』は、元々は一揃いのものであったのが、次の四巻に仕立てられて収蔵された。

- ・^{はちすか}蜂須賀本 絵八図、詞書七段
- ・藤田本 絵五図、詞書五段
- ・森川本 絵五図、詞書五段
- ・久松本 絵六図、詞書六段

このうち、森川本は分割されて、^{ごとう}五島美術館、大蔵家、森川家の所蔵となった。五島美術館が所蔵するものは国宝に指定されている。そして、日本古典文学会によって五島美術館所蔵の『紫式部日記絵巻』の複製品が販売され、そのうちの一つを本学附属図書館が所蔵している。

【国宝】

国宝は重要文化財の一種である。「国宝」という語の指す意味は文化財保護法施行（1950年）以前と以後とは異なる。1950年以前は国指定の有形文化財（美術工芸品および建造物）はすべて「国宝」と称されていたが、文化財保護法施行の日である1950年8月29日付けをもって、それらはすべて「重要文化財」に指定されたものと見なされ、その「重要文化財」の中からとくに価値の高いものとされるものがあらためて「国宝」に指定された。なお、一部の国宝は「e国宝」（サイトとアプリの双方ともあり）で画像が公開されている。

●絵を「読む」●

五島美術館所蔵の第三段の^{ことばがき}詞書に、「わかむらさきや候」という一文がある。しかし、絵には、6人の男性貴族と2人の女房が描かれているため、紫式

部に公任が話しかけている場面ではないとわかる。では、絵に描かれている人々は誰で、どのような場面なのか。合計8人いる人物のどれが誰かという情報は、絵の中には書かれていない。そのため、詞書を読みながら絵を「読む」という作業が必要になる。しかし、詞書は古文で書かれているため、古文知識と平安時代の習慣等を知らなければ、絵を「読む」ことはできない。

本展示は、「日本古典文学を読む会」という学生有志の会が、古文で書かれた詞書から絵を読み解きつつ、詳細な解説を書いている。各詞書ごとに「翻刻」（くずし字を現行で使用される文字にすること）をし、それをさらに「校訂本文」でわかりやすく示した。また、校訂本文で説明が必要な箇所には丸で囲った算用数字を振り、その下に「注」を載せた。現代語訳の代わりに「解説」で絵の場面の説明を行ない、最後に絵の人物たちがそれぞれ誰なのか、注視すべき事物にも言及した。



この解説は紙媒体での配布（於図書館）とネット上での掲載（<https://sites.google.com/view/nagakomuto/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0/%E5%8F%A4%E5%85%B8%E6%96%87%E5%AD%A6%E3%82%92%E8%AA%AD%E3%82%80%E4%BC%9A?authuser=0>）という二つの形態を採っている。COVID-19の影響でなかなか大学施設を使用できない今だからこそ、学内に立ち入り可能な期間を活用して、ぜひ大学での「学び」の一端に触れてもらいたい。



Library Report



図書館3階・AVコーナーをリニューアルしました

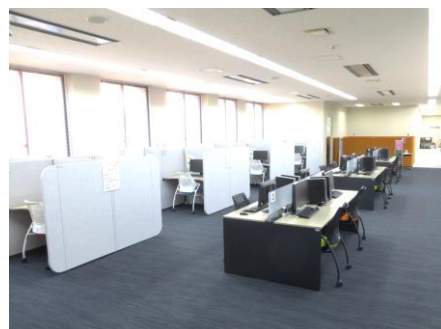
図書館3階・AVコーナーは、マルチメディアスペースに装いを新たに生まれ変わりました。これは、4号館カフェテリア機能の一部移転に伴いリニューアルしたものです。

4号館カフェテリアからパソコン30台を移設、そのうち、18台は個人ブース席となっています。

今まで図書館のパソコンは検索のみしかできませんでしたが、WordやExcel等が入ったので、データベースや館内資料を利用しながらレポート作成も可能になりました。

AVコーナーは規模を縮小しましたが、オレンジ色が目を引く心地よい空間に生まれ変わり、今までどおり図書館所蔵のDVD等を視聴することができます。

マルチメディアスペースの利用時間は図書館の開館時間内となっています。



また、これに併せ、旧3階カウンターから一般雑誌架付近もリニューアルし、ブラウジングコーナーとなりました。カウンターを撤去し、壁面にDVD等を収納する棚を設置。一般雑誌架付前は、お洒落でゆったりとした空間が広がっています。

リニューアルが終わり、これからという時に新型コロナウイルス感染症が拡大し、ゆっくりと利用する機会がなかったと思いますが、対面授業の期間など大学に来た時は、装いを新たにした図書館3階をのぞいてみてください。

図書館だより《鹿児島国際大学附属図書館報》 第40号

発行日：2021(令和3)年1月25日

発行：鹿児島国際大学附属図書館

〒891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1

TEL：099-263-0732 FAX：099-261-1198 e-mail：tosyokan@ofc.iuk.ac.jp

URL： <https://www.iuk.ac.jp/tosyokan/>

